

芸術科『書道Ⅱ』学習指導案

大阪府立門真西高等学校

1 日 時 平成 27 年〇月〇日 (〇) 第 6 限

2 場 所 府立門真西高等学校 書道教室

3 対 象 学 年 第 2 学年〇. 〇組 32 名

4 単 元 名 「篆刻 篆書による 4 分朱文印制作」 (15 時間)

5 教 科 書 「 書道Ⅱ 」 (東京書籍)

6 単 元 目 標

- (1) 篆刻作品を制作する際に自分の名前をとおして書体に興味、名前に愛着を持ち、意欲的主体的に取り組むとともに時間をかけた作業の積み重ねによる達成感を味わう。また自作品に押印することにより自作への愛着を持つだけでなく年賀状等にも利用できることを理解し、手書き文字や自作印に興味と愛着を持つなど主体的に表現や鑑賞の創造的活動に取り組もうとする。(書への感心・意欲・態度)
- (2) 空間の開け方を理解し、文字の結構の取り方に敏感になり、自らの意図に基づいて構想し、表現を工夫する。(書表現の構想と工夫)
- (3) 印刀で彫ることにより筆で書くのとは違った表現ができることに気づき、その基礎的な能力を生かし、筆の弾力を使った用筆法を身に付け様々な書体に応用できる技能を身に付け表す。(創造的な書表現の技能)
- (4) 様々な篆刻作品を鑑賞してそれぞれの表現の違いを理解し、自分の作品に赤色の印が入ることによる効果について創造的に味わう。(鑑賞の能力)

7 教 材 観

1 学期に仮名作品を制作し、仮名における小筆の扱いに慣れてきた。同じ小筆でも作製方法による仮名用と漢字用の使い勝手の違いを理解させる。また 1 年時に発泡スチロールによる簡単な白文印を作製して篆書の筆づかいにも触れてきている。今回は発泡スチロールに鉛筆で書くという単純なものではなく印刀を使って石印材に朱文を彫るという作業により、石の欠けによるサビなど筆による表現ではない新たな表現方法を味わわせ、石刻拓本と肉筆との表現の違いを発見させたい。

8 生 徒 観

「略」

9 指 導 観

1 年時に行った発泡スチロール印制作により押印の効果はある程度理解している。しかしながら単に赤があれば変わる程度のレベルでしかない。今回は緻密な表現が可能な石印材による朱文印制作を行うことにより、辺縁の効果なども含め、表現の多彩性を発見させる。また緻密な作業を行うことにより集中力をつけ、出来上がったときの達成感を味わわせ、落款の意味を理解させたうえで落款印を作り、自分の作品に押印することが如何に効果的なのかを理解させるとともに年賀状など普段使いの印としての活用を理解させ、手書き文字を身近に感じさせたい。

10 単元の評価規準

	書への関心・意欲・態度	書表現の構想と工夫	創造的な書表現の技能	鑑賞の能力
単 元 の 評 価 規 準	〔表現〕 - 文字の成り立ちに関心を持つ。 - さまざまな書体に共通する筆の弾力を使うことを理解したうえで書体による表現の違いを発見し、それぞれの場面において主体的・意欲的に活動しようとしている。 - 篆書の分間布白や楷書を中心とした間架結構を理解し、書表現における余白の重要性を知ろうとしている。 〔鑑賞〕 - 教材プリントに掲載した様々な印影の表現方法の違いを積極的に探ろうとする。	- 生徒個々の名前に起因する文字の違いによる表現意図を明確にしてその表現意図に応じた表現方法を工夫する。 - 文字の筆画と余白の関係を理解して表現する。	様々な場面において自分の作品の表現意図を明らかにする技能を身に付けている。	- プリントに示したさまざまな印の違いを理解する。 - 石材印や金属印に見られるサビの効果を理解して応用し、きっちりと押印することの重要性を理解したうえで作品に押印したときの赤の効果を感知取る。またクラスメイトの作品についての理解も深める。

学習活動における 具体の評価規 準	〔表現・関①〕 ・篆書に関心を持ち部首等が何を表わすのか考 えて、その文字の本来 の意味を理解しようと する。 ・文字調べにおいて字書 の調べ方をよく理解 し、筆の弾力を生かし た運筆で丁寧書き写 している。 ・制作過程においてプリ ントをよく読み、手順 通りに作業を進めてい る。 〔鑑賞・関②〕 ・プリントの鑑賞学習に おいて積極的に発言す る。 ・プリント鑑賞において さまざまな違いを発見 する。 ・相互鑑賞において、そ れぞれの表現の工夫点 や良さを積極的に味わ おうとしている。	〔構成①〕 ・横平堅直を理解したう えで、文字と文字の中 にある余白のバランス 、分間布白、間架結 構について理解して表 現している。 ・辺縁や撃辺、サビの効 果を理解した上で、筆 画や辺縁の太さなど を自ら考えて調整し 、表現に役立ててい る。	〔技能①〕 ・逆筆を利用した筆の 弾力を最大限に生か した運筆が出来てい る。 ・運筆の方法により筆 画に表情が出来るこ とを理解し、応用す る。 ・プリントを参考にし ながら、様々な印稿 のパターンを考えて いる。 ・石印材の印面調整を 慎重に行い、キッチリ と平らに削れている。 ・印刀を正しく使い、 鋭い切れ味を表現し ている。	〔鑑賞①〕 ・さまざまな風格の印 の違いについて感じ 取り、自分の言葉で 説明する。 〔鑑賞②〕 ・辺縁の些細な欠けに 至るまで意味がある ことを理解し、丁寧 な押印で自分の作品 を生かそう心がける。 ・パネル作品に押印し た本人やクラスメイト の印や作品について も押印の効果を理解 し、それらの工夫点 や良さを味わい、自 分の感じたことを述 べている。
----------------------------------	---	---	--	---

11 指導と評価の計画（全 15 時間）

時間	学習のねらい	学習活動	学習活動に即した評価規準				評価方法、留意点等
			関	構	技	鑑	
1 ・ 2	- 横平竖直の理解 - 分間布白の理解	- 逆筆で筆の弾力を感じながら横画ばかり水平に均等分に引き、同様に縦画も引く。 『目』の小篆体が示された後、筆順を無視して横画を四本水平に引き、後から縦画を二本引き、最後に四隅に丸みを付けて繋ぐという方法で、『目』の印篆体を書く。 - 同様に『真』『書』『高』の小篆体が示された上で横平竖直、分間布白を意識しながらどうすれば正方形に収められるのかを考えて、自分で印篆にデザインしてみたあと、示された範書を参考に、『目』と同様の方法で書いてみる。	関①	構①	技①		- 逆筆を利用した筆の弾力を最大限に生かした運筆が出来ている。 (観察) (作品) - 横平竖直を理解したうえで、文字と文字の中にある余白のバランス、分間布白、間架結構について理解して表現している。 (観察) (作品) - 篆書の分間布白や楷書を中心とした間架結構を理解し、書表現における余白の重要さを知ろうとしている。 (観察) (作品) 評価の場面 I

3 ・ 4	- 自分の名前に関心を持つ。 - 書体による表現の違いを理解する。 - 小筆の用筆法を身につける。	- プリントを配付し、今後の流れの説明を聞く。 - 朝陽字鑑精萃を用いて各自の姓名の名（仮名の名前は字源の漢字）を調べて書き写す。なお、字書にない文字については字源を先生に説明してもらい、何故掲載されていないのか理解したうえで、範書を書いてもらう。	関①	構①	技①	- 文字調べにおいて字書の調べ方をよく理解し、筆の弾力を生かした運筆で丁寧に書き写している。 - 篆書に関心を持ち部首等が何を表わすのか考えて、その文字の本来の意味を理解しようとする。 (プリント) - 横平堅直を理解したうえで、文字と文字の中にある余白のバランス、分間布白、間架結構について理解して表現している。 (観察) (作品) - 逆筆を利用した筆の弾力を最大限に生かした運筆が出来ている。(観察)(作品) (プリント) 評価の場面Ⅱ
5 ・ 6	- 印稿を考える。 - 参考印を見ながら表現の違いを知る。	字書で見つけた文字をもとに縦横の比率を1対1にデザインし、プリントを参考にして様々な印稿を考える。	関②	構①	技①	- 制作過程においてプリントをよく読み、手順通りに作業を進めている。 - プリント鑑賞においてさまざまな違いを発見する。 - 横平堅直を理解したうえで、文字と文字の中にある余白のバランス、分間布白、間架結構について理解して表現している。 - 辺縁や撃辺、サビの効果を理解した上で、筆画や辺縁の太さなどを自ずから考えて調整し、表現に役立てている。 - プリントを参考にしながら、様々な印稿のパターンを考えている。 (作品) (プリント) 評価の場面Ⅲ

7 ・ 8 ・ 9	- 生徒の考えたアイデアを生かしつつ、よりレベルの高い印稿づくり。 - 石印材印面調整	- 前時を受けて書き与えられた参考例をもとに、鉛筆で石印材の実寸大の枠を書き、実寸大で練習する。 600 番のサンドペーパーを用い、印面を平らにして、確認後印面に朱を塗ってもらう。		構①		技①	- 横平堅直を理解したうえで、文字と文字の中にある余白のバランス、分間布白、間架結構について理解して表現している。 - 辺縁や撃辺、サビの効果を理解した上で、筆画や辺縁の太さなどを自ら考えて調整し、表現に役立てている。 - 逆筆を利用した筆の弾力を最大限に生かした運筆が出来ている。 (作品) (プリント) - 石印材の印面調整を慎重に行い、キッチリと平らに削れている。 (観察) (作品) 評価の場面Ⅳ
10 ・ 11 ・ 12	- 印稿完成、縮小コピー - マジック転写 - 朱と墨による修正	- 濃い墨で細く書かせた実寸大印稿を切り取って別紙に貼り、95%に縮小コピーしたものを一人あたり 5 枚もらい、マジック転写する。 - 中心に転写できていることを確認した上で、朱と墨でハッキリ見えるように修正する。	関①	構①		技①	- 制作過程においてプリントをよく読み、手順通りに作業を進めている。 - 横平堅直を理解したうえで、文字と文字の中にある余白のバランス、分間布白、間架結構について理解して表現している。 - 辺縁や撃辺、サビの効果を理解した上で、筆画や辺縁の太さなどを自ら考えて調整し、表現に役立てている。 - 逆筆を利用した筆の弾力を最大限に生かした運筆が出来ている。 (観察) (作品) 評価の場面Ⅴ
13 本時	- 刻印 (本時) - 補刀 - 押印	- 印刀の使用法をキッチリ理解する。 - 印刀の刃の角部分で引くように彫る。 - 一旦、印材の頭部分に書いた模様などを試し彫りしてみる。 - 朱色部分を捨てノミのように先に彫ってから黒い筆	関①			技①	- 制作過程においてプリントをよく読み、手順通りに作業を進めている。 - 印刀を正しく使い、鋭い切れ味を表現している。 (観察) (作品)

1 4		画に沿って再度彫る。 ・筆画の交わる部分は少し墨溜まりのように残しておく、後から突くようにして仕上げる。 ・ズルズルなぞるようにして彫らせず、石の欠片が出るように鋭い切れ味を出す。 ・撃辺の効果を具体的に示して味わわせ、自分でもやってみる。		構①			・辺縁や撃辺、サビの効果を理解した上で、筆画や辺縁の太さなどを自ずら考えて調整し、表現に役立てている。 (観察) (作品)
1 5		・彫り上がったらしいに水洗い乾燥の後、印泥をキッチリつけ、慎重に丁寧に押印する。 ・不具合を補刀していく。 ・完成に押印後、側款の準備として側面に軽くペーパー掛けし、墨を塗っておく。 ・1学期の仮名パネル作品に押印する。				鑑②	・辺縁の些細な欠けに至るまで意味があることを理解し、丁寧な押印で自分の作品を生かすよう心がける。 (作品) (プリント)
						鑑②	・パネル作品に押印した本人やクラスメイトの印や作品についても押印の効果を理解し、それらの工夫点や良さを味わい、自分の感じたことを述べている。 (観察) 評価の場面VI

12 観点別評価の進め方

評価の場面Ⅵ

について

学習活動に即した評価規準		評価基準	具体的な事項 (評価の総括につながる事項)
	【創造的な書表現の技能】 ・ 印刀を正しく使い、鋭い切れ味を表現している。	A 印刀の角度と刃の場所を正しく理解したうえで、切れ味のある筆画を表現する技術も兼ね備えている。	・ 印刀の持ち方を指先で安定させて持ち、印刀が指の中で遊ばず、刃先にきっちり力がかかっている。 ・ 印刀の刃先のどこを使うのかきっちり理解して、線彫りにならず、石の欠片が出るように彫れている。 ・ 印刀の使い方を理解して筆画のどちら側を彫るのか考えて空間処理を行っている。 ・ 捨てノミの効果を理解した上で筆画のエッジ部分を切れ味鋭く彫れている。 ・ 切れ味は出しつつ、雑に彫って筆画を無くしてしまわないよう、慎重さを兼ね備えている。
		B 印刀の角度と刃の場所を正しく理解しているが、切れ味のある筆画を表現する技術が不足している。	
		C 印刀の角度と刃の場所を正しく理解していないうえ、切れ味のある筆画を表現する技術も不足している。	

13 本時の学習（13時）

○本時の目標

- ・ 印刀の使用法を理解し、彫る場所を確認しながら切れ味のある運刀法を身につける。

○本時の評価規準

関① 積極的な授業への取組

構① 撃辺やサビの効果を理解する。

技① 正しい印刀の使用法と切れ味のある運刀

○本時で扱う教材

教科書 「 書道Ⅱ 」 （東京書籍）

制作プリント

○学習指導の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価規準と評価方法
導入 (十分)	・ 作業準備 ・ 前時までの振り返りをする。 ・ 学習内容を知る。 ・ 学習目標を知る。 (10 分)	・ 出欠確認 ・ 前時までの学習内容を、プリントで確認する。 ・ 本時の学習内容を知る。	(観察)
展開 (三十五分)	・ 印刀の持ち方、使い方を知る。 (5 分) ・ 石印材の頭側に書き込んだ部分を試しに彫ってみる。特に筆画のクロスした部分について慎重に処理をする。 (10 分) ・ 試し彫りでの体験を生かしながら印面を彫る。 (20 分)	・ 別紙プリントを使用し、印材と印刀の持ち方を確認し、印刀の刃のどこを使うのか理解させる。 ・ 運刀方向、運刀角度の確認 ・ 捨て彫りの意義確認 ・ 線彫りにならず印刀をくい込ませるように注意させる。 ・ 朱文であること、文字である黒い部分を残すことを強調。 ・ 印刀の刃のどこを使うのか徹底的に確認。 ・ 待ち針くらいに細くまで彫ることを確認。 ・ 筆画の交わる部分は少し墨溜まりのように残しておき、後から突くようにして仕上げるということに触れておく。 ・ 印刀の背部分をうっかりあてて反対側を欠けさせないように注意。 ・ 大切なのは底ではなく、筆画のエッジ部分であることを強調するとともに底部分の細かい彫り残しがないようにある程度の深さは必要であることを伝える。 ・ 撃辺の方法を実演し、サビの付け方を学習する。	・ 集中して説明を聞き、手順を間違わずによりよい作品を作るべく努力している。 【書への関心・意欲・態度】 (観察) ・ 張りのある細い筆画で彫れている。 ・ 正しい印刀の使用法と切れ味のある運刀ができています。 【創造的な書表現の技能】 (作品) ・ 撃辺やサビの効果を理解する。 【書表現の構想と工夫】 (観察)
まとめ (五分)	・ プリントと印材を提出し、印刀を返却する。 ・ 自己評価、感想の記入をする。 ・ 後片付け ・ 次時の予告を聞く。 (5 分)	・ 作品を提出させる。 ・ 後片付けをきちんとさせる。 ・ 次回予告をする。	・ 刻印した印材 (作品) (観察)

14 具体的な指導の改善内容

評価基準（ 13 限目 評価規準 技①に基づく）

A 【十分満足できる状況】

⇒次の時間でどのように対応（指導）するか？

…ビジュアルプレゼンターで作品を見せながら、褒め称え何故良い評価をもらったのか説明する。

B 【おおむね満足できる状況】

⇒次の時間でどのように対応（指導）するか？

…ビジュアルプレゼンターで作品を見せながら、褒め称えながらも注意すべきことを通達し、今後の作品制作に生かさせる。

C 【努力を要する状況】

⇒次の時間でどのように対応（指導）するか？

…個人的に印刀の使い方、印刀の角度を徹底的に指導する。